

# 児童文学の心理学的意味についての考察

池上 詩織

(山 愛美ゼミ)

## はじめに

一般的に児童文学は、子どもが読みやすいように平仮名で書かれていたり、イラストレーションが添えられている場合が多く、子どもを読者の対象としている印象が強い。我々が子どもの頃、「あの児童文学や童話が好きでよく読んでいた」、「あの児童文学や童話を親に読み聞かせてもらった」、国語の授業などで、「主人公の気持ちになって読んでみた」という記憶がある人もいるだろう。しかし、大人になると、児童文学を実際に手にとって読むことや見ることはなくなってしまふ。児童文学を読むことで、子どもは想像力が豊かになると思われるが、大人の場合も、想像力が豊かになったり、自分の子ども時代の頃を思い出させてくれたり、懐かしさを感じさせてくれるということがあるのではないかと考える。

私は、子どもの頃は『シンデレラ (Cinderella)』や『白雪姫 (Snow White)』など、少女が主人公の児童文学をよく好んで読んでいた記憶があるが、今ではこのような本を読まなくなってしまった。しかし、大学のゼミの課題として、児童文学を読むことになり、その時に出会ったのがアン・フィリップ・ピアス (A. Philippa Pearce) 著の『トムは真夜中の庭で (Tom's Midnight Garden)』(1958)であった。この作品は「時間」という抽象的で理解が困難な問題を取り扱っているが、その構成上の斬新さは見事である。ホールの大時計が13時を打つと、裏口の扉の向こうに昼間とは全く異なった半世紀前のヴィクトリア朝風の美しい庭園が現われ、異質の時間の経過が見られるというファンタスティックな手法の作品である(依岡, 1987)。

また、ジョーン・G・ロビンソン (Joan G. Robinson) 著の『思い出のマーニー (When Marnie Was There)』(1967)という作品も読んだ。この作品はスタジ

オジブリ制作、米林宏昌監督の長編アニメーションとして映画化されていることでも有名である。しかしこの作品は、『トムは真夜中の庭で』(1958)と話の内容や構成が非常によく似ていたことに気付いた。作品の内容が似ているものの、それぞれ主人公がどのように心理的に成長していくかという点には違いがあることに気付いた。また、どちらも時間の儚さや主人公の気持ちなど、大人になって読んでみても深く考えさせられる作品であった。このように児童文学には、子どもだけではなく、大人が読んで改めて考えさせられることがあり、著者には、子どもだけではなく、大人に対しても伝えたい事があるのではないかと考えた。本論文では、ピアスの児童文学作品における主人公の心理的成長過程や登場する子どもたちの像を分析し、また児童文学が子どもや大人に与える影響、そして著者が児童文学を通して何を伝えたいのかについて考察を試みる。

## アン・フィリップ・ピアスの作品と 主人公の心理的分析

ピアスはイギリスの児童文学の「第二の黄金時代」と呼ばれる1950年～60年代にかけての、子どもの本の隆盛期を代表する作家の一人だと言われている(白須, 2005)。彼女の作品は、主人公の子どもたちの視点で物語が進展する。また、現実とは別の世界に訪れてしまうなどの設定や、不可思議さが詰め込まれており、ファンタジー性に溢れ、引き込まれるような作品が多い。ここでは、ピアスの作品と主人公の心理的成長過程について述べる。

## 『トムは真夜中の庭で』

### 最初の場面

この作品は、主人公トム・ロングの失望の場面から始まっている。トムは弟のピーターがはしかにかかってしまったため、夏の休暇を家族と過ごすことが出来ず、親戚のおじさんとおばさんの家に預けられることになる。トムが連れてこられた家はアパートで、庭もなく、庭で弟と遊ぶことも出来ない上に、狭い部屋に押し込められて息苦しい思いまでしていた。このことから、トムは遊び相手と遊ぶ場所を強く求めていたのではないかと考える。トムにとって遊ぶことが楽しみであり、安らぎである。しかし、それを、親戚の家という環境がすっかり変わってしまったところに預けられることで失ってしまい、精神的に苦痛を与えられていたのではないだろうか。自由であることが完全になくなってしまい、追い詰められていたと考えられる。

### おかしな古時計

おじさんの家は昔の大邸宅をいくつか区切ってアパートにしたもので、玄関を入ったところのホールには大きな古時計があった。ある夜、寝付けず、その古時計から存在しえない13時の鐘の音を聞いて驚いた。その古時計はこの家の大家であるパーソロミュー夫人のものであり、触ってはダメだと言われていた。トムは存在しえない13時の鐘の音が鳴るのはどういうことなのだろうと思ったのと同時に、この古時計には何かあると感じた。トムは真夜中にも関わらず、古時計の近くにある裏口のドアを開けた。このように古時計から存在しえない13時の鐘の音を聞くと、恐怖を感じてしまう人が多いかもしれないが、トムは恐怖を一切感じる事がなく、どうしても気になってしまったがために裏口のドアを開けてしまう。子どもには一旦気になると強く食いついてしまったり、確かめずにはいられなくなってしまう傾向があるように思われる。

### 存在しないはずの庭園

ドアを開けるとそこには花壇があり、花が咲き乱れ、木がそびえたつ立派な庭園があった。家に

存在しないはずの庭園があることに、トムはまた驚いた。しかし、翌朝になって起きてから調べてみるとそこには庭園などはなく、家が並んでいるだけであった。トムは、夜になると、この庭園を訪れることにした。しかし、夜であるはずなのに、庭園ではきまぐれに時間が異なるのである。朝露の降りたさわやかな朝であったり、太陽の光が照り映える穏やかな午後であったりするのである。また、他にもドアをすり抜けることが出来たり、雷によって倒れた木が復活したり、時間の流れが逆行したりと不思議なことに満ち溢れていた。しかし、遊ぶところや自由もなく、精神的にも追い詰められていたトムにとってこの存在しない庭園こそが不思議さに満ち溢れた魅力的な場所であり、何か楽しいことが始まるのではないかというドキドキ感やワクワク感によって、トムはこの庭園に引き込まれたのではないかと考える。

### 不思議な少女ハティとの出会い

トムは庭でハティという少女に出会った。トムはハティと一緒に遊んだり、一緒に過ごしているうちに親しくなっていった。やがてトムは、その庭園にいる間は現実の世界では時間が進んでいないことに気付く。そして永遠にその庭園に留まろうと考えるようになる。ところが、ハティはしばらくの間にすっかり大きくなり、若い大人の女性へと成長していった。そしてハティは、同年齢の男性に心を移してトムのことを忘れそうになる。また、家の方から帰宅するように催促がきて、トムは焦ってしまうが、もはや庭園への道も通用しなくなってしまった。トムは、庭園とハティを失ってしまったことに激しく取り乱してしまうが、翌朝この家の大家でもあり、古時計の持ち主であるパーソロミュー夫人を訪ねたところ、彼女がハティと同一人物であることが判明する。トムは、パーソロミュー夫人の過去の思い出に入り込んでいたことを知る。トムが自分だけのものとして経験した庭園は、パーソロミュー夫人にとっても、永遠に心にとどめておきたい子どもの頃の楽しい彼女だけの理想の世界であったことが分かる。

このように、あらゆるものは、時の流れによって変化してしまう。永遠に続くものなどなく、全てのものは風化したり、消え去ったり、姿を変え

てしまうものもあるだろう。そして我々は、何か手を加えてそれを止めることは出来ないのである。しかし、人間の記憶の中にあるものは、確実にその人だけのものになる。その記憶を捨てずにいること、思い出すこと、大切にすることがその人に力を与えることがある。そしてこの記憶は、トムにとってもパーソロミュー夫人にとっても、とても意味深いものになったのであろう。トムは、個人の中で集積された時間の流れを発見し、全ての人間がみんな子どもであった時代を持っていることを悟る。自分なりに納得した上で、現実に向かい合うところを通して庭園での体験がトムに成長をもたらしてくれたのである。

### トムが訪れた家と庭園のモデル

『トムは真夜中の庭で』でトムが訪れた家と庭園はピアスが子どもの頃に住んでいた家と庭がモデルになっている。ピアスの家は、代々、その土地で大きな製粉業を経営していたのである。大きな邸宅には非常に広い庭園があり、草花が咲き乱れ、一家は犬や猫を飼い、また近くには川が流れており、そこで泳いだり、カヌーを漕いで遊ぶことが多かった。しかし、ピアスの父は製粉業の引退を決意し、家と庭園を手放すことになってしまった。自分の家と庭園が売られることを悲しんだピアスは、この家と庭園をモデルにした物語を書くことにしたのである。

トムが訪れた庭園は、ピアスが過ごしてきた広い庭園の、ほとんど細部にいたるまでの写真だと言われている。古いイチイの木が芝生の周囲を取り巻いていたというのが、この作品に生き生きと描かれている真夜中の庭は、ほとんど細部にいたるまで、その庭園の写真だという（高杉、1958）。これらのものを、ピアスは細部に至るまで正確に『トムは真夜中の庭で』に詰め込んだ。

ピアスは、子どもの頃の記憶を大切に、作品として残すことでいつでも思い出せるようにしたのである。ピアスにとって、子どもの頃の記憶が今の自分や生活に希望や活力を与えてくれることがあるということを伝えたかったのではないかと考える。パーソロミュー夫人のように大人になり、やがて年老いてしまっても、子どもの頃の記憶が

人間の中で強く生き、力を与えてくれることがある。

### 『思い出のマーニー』

次に、ロビンソン著の『思い出のマーニー』を取り上げ、『トムは真夜中の庭で』との類似点及び相違点について、また主人公の心理的成長過程について述べる。

#### 最初の場面

主人公のアンナは喘息を患っていた。両親と祖母を亡くしたこともあり、心を閉ざし、周囲の友達ともなじめずにいた。また、不安なことを考えすぎたり、自分で自分を責めてしまう性格であるため、その都度喘息の発作が出てしまっていた。そこで、養い親の元を離れ、喘息の療養と転地のために海辺の老夫婦の家で預けられることになる。

『トムは真夜中の庭で』の共通点としては、トムと同じようにアンナも親戚の家に預けられる。アンナは友達ともなじめずにいたため、孤独や不安な中、親戚の家に預けられることで、より不安感や混乱が増してしまう。トムもアンナもいつもとは別のところへ行くことによって、精神的にも負担が大きくなってしまったのではないかと考える。

#### 不思議な屋敷

アンナは、急に預けられたこともあり、老夫婦ともなじめなさを感じていた。ある日、船着き場の近くにある大きな屋敷を見つけた。この屋敷は地元の人にとってはあまり知られていなかった。しかし、アンナはその屋敷のことが気になり始め、屋敷の中には誰も住んでいないのに、アンナは誰かが住んでいるような感じがしたり、持ち主が帰って来るのを待っている感じがした。その屋敷のことが気になり、よくその屋敷を見に行くようになってしまう。

『トムは真夜中の庭で』の場合にも、トムが不思議な庭園のことが気になり始めて、その庭園を訪れるようになってしまう。また、アンナも屋敷を見た瞬間からその屋敷のことが気になり始めて、屋敷を見に行くようになってしまう。どちらも自らの足を運んでいることから、その不思議な

存在である庭園や屋敷のことが気になって仕方がないことが分かる。トムが不思議な庭園に導かれてしまったように、アンナも不思議な屋敷の魅力に自然と引き込まれてしまう。孤独だったトムやアンナにとって、この不思議に満ち溢れた庭園や屋敷は、何かおもしろいことや素敵なことが始まるかもしれないという期待感や、希望を感じさせるものだったのではないかと考える。また、思春期くらいの子どもは気になる対象があると確かめずにはいられないということが分かった。

### 不思議な少女マーニーとの出会い

アンナはある夜中に一人でボートに乗って屋敷の方へ向かった。そこには誰も住んでいないはずなのに、金色の長い髪の少女マーニーと出会う。それからアンナとマーニーは夜のピクニックに出掛けたり、一緒に遊んでいくうちに親しくなっていく。マーニーはアンナの唯一の友達となり、だんだん心を開いていくようになる。

『トムは真夜中の庭で』において、トムが庭園でハティと出会ったのと同様に、アンナも屋敷でマーニーと出会う。どちらも自分が住んでいる世界とは違う世界の少女と出会うのである。違う世界の少女に出会ったことによって、自分が孤独だったことや親戚の家に預けられ不安だった気持ちも忘れることが出来た。トムにとってハティ、アンナにとってはマーニーと一緒に過ごすことによって、癒しや安らぎを得、それが心の支えになっていたのではないかと考える。

### 不思議な少女の正体

親友のように仲が良くなったアンナとマーニーであったが、マーニーは近々他所へ移されてしまうことが決まった。マーニーがいなくなった後の屋敷には五人兄弟のリンゼーさん一家が引っ越してきた。そして、その屋敷からマーニーという少女が書いた日記が見つかる。その日記によると、マーニーは50年以上前の屋敷に実在した少女であった。マーニーは成長し、エズミーという娘を産んだ。しかし、エズミーは女の赤ちゃんを産んですぐに交通事故で亡くなってしまった。そして孫にあたる女の赤ちゃんをマーニーが引き取ることになる。その女の赤ちゃんこそアンナであり、ア

ンナの祖母にあたるのがマーニーであった。

また、結末には、『トムは真夜中の庭で』のそれとの類似性が見られる。トムが庭園で出会った少女ハティの正体は、家の大家であるパーソロミュー夫人であったのと同様に、アンナが屋敷で出会った少女マーニーの正体は、アンナの祖母であった。どちらの作品も正体はそれぞれ身近な存在の老人であり、主人公はその老人の子どもの頃や過去の思い出に入り込み、誰にも子ども時代というものがあるということを知るのである。

『トムは真夜中の庭で』はファンタスティックな要素があり、ハティはどんどんと女性に成長していくが、トムはいつまでも少年のままであることから、時間というものの儚さと時の流れによって様々なものが変化していくことを強調されている。また、『思い出のマーニー』は主人公はアンナであるが、マーニーも主人公である。アンナは両親を失い、周囲ともなじめず孤独であり、愛を知らなかった。また、マーニーも大きな屋敷に住み、毎晩屋敷で大勢の人を招いてパーティーを開いているくらいとても華やかな生活を送っていることを自慢していたが、実際にはマーニーは両親から放ったらかしにされていたり、召使いからもいじめられていた。マーニーもアンナと同じように孤独であり、周囲の人々に愛されることもなく、愛し方も分からなかったのではないだろうか。アンナとマーニーはそれぞれ自分と同じような状況にあったため、そのことが共鳴し、二人が出会えたのではないだろうか。二人が出会ったことは偶然ではなく、必然であり、相手に対して心を開いても良いということや、人々との愛情に満ちた関係を結ぶことの大切さを知ったのではないかと考える。

両者の話の内容はよく似ていることが明らかになったが、それと同時に筆者の伝えたいことや思いはそれぞれ異なることがよく分かった。どちらの作品も異界の世界で異界の人と出会うということでも不思議な体験をしたが、主人公が様々な体験や人々との出会いを通してどう成長していくかということが異なっている。トムは時間の儚さや時の流れによる変化を知り、アンナは愛情や友情を知った。我々は異界へ行くということは出来ないが、普段の生活の中で様々な経験や人との出会い

が新しい発見や自己成長にも繋がり、刺激にもなるのではないかと改めて考えさせられた。また、今の時間を大切に生きなければいけないことや家族や友人、自分の周りの人や自分のことを愛してくれる人を大切にしなければいけないと改めて感じた。

### 『まぼろしの小さい犬 (A Dog So Small)』 (1962)

次に長編第三作の『まぼろしの小さい犬』と取り上げる。この作品は、『トムは真夜中の庭で』に見られるような時間と空間のファンタスティックな世界を扱っているのではなく、落ち着いた現実の世界で構築される子ども独自の世界の一つのありようが捉えられている作品である(依岡, 1987)。

#### 最初の場面

ロンドンで暮らす主人公の少年ベンは、ブリューイット家の五人兄弟の三男坊である。兄弟の中でも真ん中なので、上の姉たちはすでに自立していたり、親も下の弟たちにかかりっきりになってしまったため、放ったらかしにされやすく、それもあってか彼は兄弟の中でも孤立していた。

#### ベンの中のファンタジー

ベンは、兄弟の中でも孤立していたこともあり、自分で自分を慰めるためにファンタジーの中に逃げ込んでいた。ベンは、強い犬についてファンタジーを描くのが好きであった。その強い犬というのが狼と戦うボルゾイ犬だった。ベンファンタジーの中のボルゾイ犬の勇姿が、自立への憧れへと導いていた。ベン、「犬」というものへの執着が非常に強いもののように感じられる。兄弟の中でも孤立していたため、「犬」が唯一の「仲間になれる友達」のように感じていたのかもしれない。

#### 祖父との誕生日の約束

ベンが兄弟の中で孤立しているように感じていた田舎に住んでいる祖父が、ベンの誕生日に犬を一匹くれると約束していた。しかし、その待ちに待った誕生日の日に、ベンは朝早く起きて郵便の

届く時間を待ちわびていたが、届いたのは犬ではなく、犬の絵であった。その絵の裏側には「チキチトチワワ」と記載されており、その時から想像の「チキチトチワワ」がベンの心の中に住むようになった。「チキチトチワワ」は、ベンの中でボルゾイ犬の印象もあったのか、賢く、勇敢で忠実な犬であり、それはベンにとって理想の愛犬を思い描いたものだった。ベンは、それから犬に夢中になってしまい、図書館に行ってチワワ種のことを調べ始めるようになった。我々も夢中になるものがあると、それについて調べずにはいられなくなったり、ほしい物が手に入らないとそのほしい物への執着がより強くなってしまったりする経験があるのではないだろうか。

#### ベンの中の秘密

ベンの母親はベンが犬のことを図書館で調べているのを見て、「犬をまだ欲しがっているのか」と聞くが、「欲しくない」と答えてしまう。心の中にいる「チキチトチワワ」のことを話してしまいそうになるが、秘密にしておく。この「チキチトチワワ」を自分の中で秘密にしておくことが、ベンのアイデンティティを支え、実際に犬をもらうことができなくても、空想の中で安らぎと癒しを見だし、孤立して傷ついてしまった心を癒しているのではないだろうかと考える。

#### 交通事故

四六時中目をつむって「チキチトチワワ」と過ごすようになっていたベンは、ある日とうとう交通事故にあってしまう。危うく命を落としそうになり、ベンはやっと現実の世界に引き戻される。ベン自分だけの空想に浸ることで安らぎと慰めを求めていたが、空想に浸るということは、危険なこともついてくるのである。自分だけの世界に閉じこもることは依存のような感覚に陥ることであり、少し病的で怖いことでもある。

#### 子犬をもらえる日

ベンの祖父が飼っている犬のティリーが子犬産み、一匹子犬をもらえることになる。それは、ベンが待ち望んでいた、生きている本物の子犬をもらえる日がやって来たのと同時に、ベンにとって

克服しなければならない現実の犬との対決でもあった。ベンの前に現れたのは、ブルブル震え「チキチトチワワ」とは大きさも色も似ても似つかぬ平凡で臆病な犬だったため、ベンは少し落胆してしまうが、その子犬を抱いて運んだときに、自分の体に預けられた子犬の温かさ、呼吸をする時の体の動きを思い出す。現実に戻った時、ベンは温かい贈り物を与えられたのである。その贈り物を受け入れた時、ベンは自分の犬との関わりに気づき、犬に対する責任の認識を深めているのである。

### 『真夜中のパーティー (What the Neighbours Did and Other Stories)』 (1972)

次に短編第一作『真夜中のパーティー』を取り上げる。この作品は、1958年から1972年の間に書かれ下記の8つの物語からなり、いずれもピアスが住んでいるケンブリッジに近いグレート・シェルフォードの周辺の自然を背景に、そこに実際起こった出来事を素材に用いている(猪熊, 1972)。

#### 1. よごれディック

よごれディックと呼ばれたお金や物にも執着せず、動物を愛し、最後はふらりと村を去っていく「よごれディック」の生き方が共鳴を呼ぶ。

#### 2. 真夜中のパーティー

四人の兄弟が両親の寝ている間に台所でパーティーを開く。次の日の朝、どうやってお母さんにばれないようにしようかと考える。そして長女が考えた作戦が大成功する。

#### 3. 牧場のニレの木

古くなったニレの木が倒れそうで危ないので、木を切り倒してしまおうということになってしまう。しかし、好奇心旺盛な少年たちが大人の目を盗んで自分たちで木を切り倒してしまう。

#### 4. 川のおくりもの

川で見つけた宝物のイシガイをいとこのローリーが持ち帰ろうとしていたので、ダン少年は黙って川に戻そうとする。イシガイをめぐるいとこ同士二人の少年の揺れ動く感情を描いている。

#### 5. ふたりのジム

耳の聞こえないおじいさんジムと無口な孫のジ

ムが家族に見つからないように隣村へと出かける。二人のジムの暖かい交流と冒険を描く。

#### 6. キイチゴつみ

ヴァルという少女が家族とキイチゴつみに行くが、せっかく積んだキイチゴを全て落として台無しにしてしまう。お父さんから怒られると思ってその場から逃げたヴァルが、見知らぬ家に立ち寄る。しかし、ヴァルはお父さんのハンカチをその家に忘れてきたことに気づき、翌日その家を探しに出かけたヴァルとお父さんであったが、家は見つからなかった。

#### 7. アヒルもぐり

太っているため、みんなから「ソーセージ」と呼ばれ、からかわれている少年が池にアヒルのように頭から水中に突っ込み、逆立ちをして潜る。それからしばらく水の中にいて水面に顔を出すと、アヒルもぐりをさせられた。そして池に投げられたレンガを拾う潜水遊びをしていた少年はレンガの代わりにブリキの箱を拾う。

#### 8. カッコウ鳥が鳴いた

バット少年は、カッコウの鳴きまねが上手い近所の小さい女の子ルーシーを連れて川をさかのぼる小冒険に出かける。

上述のように『真夜中のパーティー』には、子どもの何気ない日常に起きる小さいことであるが、忘れがたい不思議な出来事の数々、また夢と現実の世界を行き来するような8つの短編が収められている。大人の感性からすれば、何もこれといった事件ではないかもしれない。誤魔化すための嘘や、大人への隠し事、子どもだけの冒険など、子どもたちにはこのような出来事に希望に満ちていることを語っている。これらの物語は、我々に子どもの頃の記憶を思い出させてくれたり、誰もが思い当たるような懐かしさを感じさせてくれるであろう。

### ピアスの創作活動に 大きな影響を与えた経験

ピアスの年譜をたどってみると、彼女のその後の創作活動に大きな影響を与えたと思われる次のような二つの重要な経験がある。

一つ目は、1945年から13年間、英国放送協会(BBC)の学校放送部門(ラジオ)で脚本家兼プロデューサーとして勤務したことである。ピアスは英国放送協会でも脚本家として活動する中、あらゆる種類の物語を20分の番組用書き直さなければならず、その結果、簡潔にするために物語の構造を素早く見抜くことを身に付けた。また、声に出して語られた言葉の力を信頼し、自分の作品が読み聞かせに適したものであるようにと常に心掛けて書くようにしたことである。

二つ目は、1959年から本格的なストーリーテリングの活動をしたことである。

ストーリーテリングとは、伝えたい思いやコンセプトを以前あったことを思い起こさせるような印象的な体験談やエピソードなどの物語を引用することで、聞き手に強く印象づけることである。子どもたちと向かい合って物語の読み聞かせをしながら、子どもたちからの反応を直接受け止めるという経験を通して、ピアスは聞き手の子どもたちを引きつける語りの呼吸や間を体感し、それがピアスの作品の独特なリズムや表現を生み出すようになる(白須, 2005)。

このような経験は、作品を書く上でもいかされ、彼女は児童文学作家として活躍するようになった。ピアスは子どもたちとの出会いやコミュニケーションも多かったため、子どもたちの視点や感性をより身近に感じ、それが大切なことであると作品を通して伝えたかったのではないかと考えた。また、物語を声に出して聞くことによって子どもたちがどう想像するかということや子どもたちのことを考えてこれらの活動をしていたのではないだろうか。そして、ピアス自身が書いた作品も声に出して聞いてもらえる大切さを考慮して、独特なリズムを生み出せるようになったのではないかと考える。

### ピアスの作品に登場する子どもたちと 共通して見えてくる子どもの姿

ピアスの作品に登場する子どもたちは、常に何かを探求したり、追求したりして、一途に憧れへの対象へ向かい、自分だけの時間や空間を持つとする(依岡, 1987)。

トムは不思議な庭園を探し、ベンは幻の小さい犬を追い求め、何かに夢中になっている。親を誤魔化すためにばれるかもしれない嘘をついたり、親や周りの大人に隠し事をしたり、子どもたちだけでいつもより少しだけ遠くへ冒険に出掛けたり、「ダメだ」と分かっているやってしまったという経験がある人もいるだろう。子どもたちは何気ない日常生活の中で子ども独特の時間や空間を築き、そこに閉じこもろうとすることがある。また、大人たちの目に触れないように目に見えない壁を築くこともある。しかし、そこには危険が付きものでもある。ベンのように、幻の犬に会いたいがために目を閉じて歩いて車にひかれてしまった場面があったように、自分の世界に閉じこもることは危険なこともあることが分かった。生と死のギリギリの世界まで行くことによって現実の世界に引き戻される。現実で犬を飼えるようになり、幻のものを手に入れることはできないが、現実にも手に入れたものを大切にしなければならない重要性や、人や動物の温かさや愛で寄り添ってくれる存在の大切さを知る。子どもたちは、自分たちだけの時間や空間から出てくるその時に彼らの心の中で大きな変化が生じ、現実と向き合い、少しずつ前に進んでいくのである。

読者としての子供たちは物語の中で我を忘れることが出来るだけではなく、同時に自分自身を発見することが出来るのではないかと考えた。また、子どもたちは物語の中に登場する子どもの像に自分を映すだけではなく、その中の大人たちの姿にも自分の人生に見るのかもしれない。

## 考 察

児童文学は、子どもの時には何も考えずに読んでしまったかもしれないが、大人になって読んでみると、様々な発見があり、深く考えさせられることも多かった。例えば、トムは庭園のことやハティに出会ったことを秘密にしていた。またアナもマーニーと出会ったこと、ベンは幻のチキチトチワワのことを周囲の人には秘密にしていた場面があった。このように子どもは自分たちの中で秘密を作ろうとし、またそれを誰にも知られないように守ろうとする。秘密を守るという行為が子

どもたちのアイデンティティを強くする影響があるのではないかと考える。また、子どもたちだけで秘密を共有することで、トムやアンナ、ベンは徐々に元気を取り戻し、不安な様子もなくなっていた。秘密を守ることは子どもたちの心のケアにも繋がるのではないかと考えた。秘密には人間を心理的に強くするという力があるのかもしれない。大人でも秘密を他者と共有することがあるかもしれない。大人にとっても親しい人と秘密を共有することで、安心感や信頼関係を結ぶきっかけになるのではないだろうか。

また、児童文学には、自分の子どもの頃を思い出させてくれる効果があると考えている。親や周囲の人から「ダメだ」と言われると、余計に好奇心が刺激されるものである。例えば、トムは「古時計に触ってはダメだ」と言われていても裏口の扉を開けてしまい、アンナは秘密の友達マーニーのことで、ベンは幻の小さい犬のことを隠し通そうとしていた。誰にも、このような周囲の人に嘘をついて隠し事をしたり、子どもたちだけで秘密基地を作って冒険に出かけたりした経験があるだろう。子どもの頃の思い出は人によって様々であるが、このような経験が自分にもあったと実感することが出来るのではないかと感じる。私も友達同士で秘密を共有したり、行ったことがない公園まで友達に連れて行ってもらい、いつもとは違う場所で遊んだ思い出がよみがえってきた。児童文学を読むことによって、忘れかけていた思い出を思い出することが出来たり、懐かしさを覚えた。子どもの時は何気なく遊んだり、過ごすことに特に何も感じていなかったが、今振り返ると、その時は何気なく自由に過ごすこと、友達や家族、周囲の人と過ごすことが安らぎであり、希望や輝きに満ちていたのではないかと改めて感じる事が出来た。

また、児童文学には、読みながら主人公の気持ちや他者の気持ちになって考えながら読むことが出来るようになる。登場人物の気持ちを考えながら読むことで、コミュニケーションをする上での自分自身のことや、相手の立場になって物事をとらえる視点を育むことが出来るのではないかと考える。

児童文学を通して、筆者が伝えたいことは、子どもたちは時々、大人が思いつかないような行動

や発想を起こすことがある。我々も子どもの頃は、このような経験があったかもしれないが、よく覚えていないという人もいるだろう。児童文学は、子どもが中心となった作品が多く、子どもが何気ない生活の中での起こった事件や発見などが詰め込まれている。大人はそれを大したことはないと感じるが、それは子どもたちにとっては、柔軟な好奇心を持ち、何かを探求したり、吸収することが希望に満ち、自己成長や生きる活力となっている。子どもたちの視点や感性、純粹さ、ありのままの姿を忘れかけてしまいそうになるが、児童文学はそれを大人になっても忘れさせない、大切なことであると改めて伝えているのではないかと考える。しかし、大人になっても子どもたちと同じように、何気ない生活の中で事件や発見が起こるかもしれない。人生を生きていく上で、様々な経験をしたり、多くの人々との出会いや別れがある。我々も様々な経験や人々の出会いによって、時には壁にぶつかって立ち止まってしまうことがあるだろう。しかし、それは自分が成長していく上で大切なことであり、新たな課題や発見に繋がるに違いない。この世界には学校へ行けない人や、やりたいことが出来ない環境に置かれている人も存在する。我々は日常生活が当たり前で送れていることや、様々な経験が出来ること、多くの人と出会いを通して今を生きていることに感謝しなければならぬ。自分を愛してくれる人や守ってくれる人がいることを改めて感謝し、大切にしたいと児童文学を通して学ぶことが出来た。

## 参考・引用文献

- Pearce, A. P. (著) (1958): *Tom's Midnight Garden*.  
高杉一郎 (訳) (2000) トムは真夜中の庭で.  
岩波書店
- Pearce, A. P. (著) (1962): *A Dog So Small*. 猪熊葉子 (訳) (1989) まぼろしの小さい犬. 岩波書店
- Pearce, A. P. (著) (1972): *What the Neighbours Did and Other Stories*. 猪熊葉子 (訳) (2000) 真夜中のパーティー. 岩波書店
- Robinson, J. G. (1967): *When Marnie Was There*. 松野正子 (訳) (1980) 思い出のマーニー上・下. 岩波書店.



## 児童文学の心理学的意味についての考察

河合隼雄, 長田弘 (1998): 「子どもの本の森へ」  
岩波書店

Tolkien, J. R. R (著) (1964) 猪熊葉子 (訳) (1973):  
「ファンタジーの世界-妖精物語について-」  
福音館書店

岡田純也 (1983): 「児童文学への誘い」 株式会社  
創世記

白須康子 (2005): *The Shadow-Cage* におけるス  
トーリーテラーとしての *Philippa Pearce*. 人  
文研究: 神奈川大学誌, **157**, A1-A28.

依岡道子 (1985): フィリッパ・ピアスの「トム  
は真夜中の庭で」でもう1つの時間. 名古屋  
大学紀要, **31**, 269-274.

依岡道子 (1987): フィリッパ・ピアスの作品に  
登場する子どもたち. 名古屋大学紀要, **33**,  
257-264.

ピアス年譜 [http://www.misheilasakurane.jp/  
pearce-note.htm/](http://www.misheilasakurane.jp/pearce-note.htm/)

## 資料: アン・フィリッパ・ピアスの年譜

1920年1月23日 ケンブリッジ州のグレート・シェ  
ルホードという村で四人の末っ子として生まれる。  
1925年(5歳) 胃炎にかかる。ベッドでよく本を  
読んで過ごす。

1928年(8歳) ケンブリッジのパーズ女学校に入  
学する(～1938年)。

1942年(22歳) ケンブリッジ大学ガートンカレ  
ッジに入学する。

最初の2年間は英語・英文学を専攻、最後の1年  
は歴史を専攻し、学士・修士号を取得。卒業後、ボ  
ーンマスで非常勤の公務員として働く(～1945年)。

1945年(25歳) ロンドンを出て、英国放送協会  
(BBC)の学校放送部門(ラジオ)に就職し、脚  
本家兼プロデューサーとして勤務する(～1958  
年退職)。

1952年(32歳) 肺結核にかかり、ケンブリッジ  
で入院生活を送る(11ヶ月)。

1955年(35歳) デビュー作『ハヤ号セイ川をい  
く(Minnow on the Say)』を発表する。

この作品の背景となるセイ川の風景はピアスが  
子どもの頃によく遊んだ川とその川辺にあった父  
親の水車場や棧橋の風景であり、川での遊びの楽

しさを思い出して書かれた作品である。

1958年(38歳) 長編第二作『トムは真夜中の庭  
で(Tom's Midnight Garden)』を発表する(カー  
ネギー賞受賞)。

1959年(39歳) オックスフォード大学クラレン  
ドン出版局の教育部門で非常勤の編集者として勤  
務(～1960年)するが、仕事が気に入らず、フリー  
になる。

1960年(40歳) ロンドンに戻り、ストーリーテ  
リングを始める。アンドレ・ドイッチェ社で非常  
勤の児童書の編集者として勤務する(～1967年  
退職)かたわら、BBCラジオの大人向けと子ども  
向けの両方の番組の脚本家兼プロデューサーを  
務める(～1963年)。

1961年(41歳) 初の絵本『おばあさん空をとぶ  
(Mrs.Cockle's Cat)』を出版する。

1962年(42歳) 長編第三作『まぼろしの小さい  
犬(A Dog So Small)』を出版する。

1963年(43歳) 5月9日果樹栽培業を営むマーティ  
ン・クリスティーと結婚する。

1965年(45歳) 娘サラ誕生。毎晩のように読み  
語りをする。編集者を経て作家となる。十週間後、  
夫が脳溢血で亡くなる(享年52歳)。

1966年(46歳) 絵本『ふしぎなヒマワリの花(The  
Strange Sunflower)』を出版する。

1969年(49歳) 連作短編集『それいけちびっこ  
作戦(The Elm Street Lot)』を出版する。BBC  
のテレビ番組のために書き下ろした5話を放映後  
の本にまとめたもの。

1971年(51歳) 『りす女房(The Squirrel Wife)』  
と「ライオンが学校へやってきた(The lion came  
to school)」などのもっと年齢の低い幼児向けに絵  
本の文も出版する。

1972年(52歳) 短編第一作『真夜中のパーティー  
(What the Neighbours Did and Other Stories)』  
(全8話)を出版する。1974年度の国際アンデル  
セン賞オナー・ブックに選ばれる。動物好きの娘  
のために故郷グレート・シェルフォードに戻り、  
犬、猫、ヤギ、馬、アレチネズミを飼う。

1977年(57歳) 短編集第二作『幽霊を見た10の  
話(The shadow -Cage and Other Tales of the  
Supernatural)』を出版する。1979年度のカー  
ネギー賞候補となる。

- 1983年（63歳）長編第四作『サティン入江のなぞ（The Way to Sattin Shore）』を出版する。
- 1984年（64歳）アメリカに講演旅行に行く。
- 1986年（66歳）短編集第三作『こわがっているのはだれ？（Who's Afraid ? and Other Stories）』を出版する。IBBY 東京大会で講演のため日本へ来日する。また、北海道や大阪、京都などを旅行、講演する。
- 1993年（73歳）英国学士院文学会員になる。
- 1995年（75歳）ハル大学より名誉文学博士号取得する。
- 1997年（77歳）児童文学への貢献によって O. B. E.（大英帝国4等）受賞する。
- 2000年（80歳）短編第四作『8つの物語 - 思い出の子どもたち（The Rope and Other stories）』を出版する。
- 2002年（82歳）短編集の4冊を収録した『日常と怪異（Familiar and Haunting : Collected stories）』をアメリカで出版する。
- 2004年（84歳）中編『川べのちいさなモグラ紳士（The Little Gent leman）』を出版する。
- 2006年（享年86歳）12月21日ダラム州で亡くなる。